

地球縦回り一周の旅

グリーンランド編 報告書

2004.3.30~6.15



地球縦回り事務局

代表 大場 満郎

〒110-0005 東京都台東区上野 1-11-5 時計会館 1 階

Tel : 03-5807-8313 Fax : 03-5807-8301

E-mail : mail@global-edventure.net

Web : <http://www.global-edventure.net>

目次

序章	P.3~6
■ 挨拶	P.4
■ 概要	P.5
■ グリーンランド基礎データ	P.6
第一章 活動報告	P.7~20
■ 隊員紹介	P.8
■ 旅の軌跡	P.9
■ グリーンランド行を終えて by 大場満郎	P.10
■ グリーンランド環境調査 by 長谷徹志	P.12
■ イヌイット民族文化レポート by 宮下典子	P.16
■ パイロット校との交信記録	P.20
第二章 参加者の感想	P.21~36
■ パイロット校	P.22
■ 専門家	P.31
第三章 メディア報告	P.37~41
■ 新聞	P.38
■ 雑誌	P.40
■ テレビ	P.41
■ ラジオ	P.41
第四章 収支報告	P.42~43
謝辞	P.44~46

序章

ご挨拶

この度は、グリーンランドの旅に、ご協力、ご支援を賜りまして、誠にありがとうございました。「地球縦回り一周の旅」の第一弾・グリーンランドを無事に終え、帰国いたしました。

この旅は、物見遊山ではなく、隊員がテーマにそって、現地から通信機器を用いて情報を発信してゆくものです。グリーンランド行のテーマは二つ。一つは「大気」、もう一つが「民族」です。大気のテーマでは、グリーンランドの内陸氷床を長谷徹志隊員と私が、スキーセールで縦断しましたが、その間、長谷隊員が、大気や降雪サンプリングを行いました。又、紫外線の強さも計測しました。現在は、大学の研究室でサンプルの分析を行っており、結果が楽しみです。民族のテーマでは、宮下典子隊員が、グリーンランドのイヌイットの村々を訪ね歩きました。そして、イヌイットの生活、文化等を体験し、見たこと、感じたことを報告してきました。

今回の旅では、衛星電話を使い、パソコンで文字情報と写真を東京にある地球縦回り事務局に転送し、ホームページに掲載しました。又、衛星携帯電話で、全国に6校あるパイロット校の生徒たちと隊員が、リアルタイムで会話（質疑応答）も行いました。子供たちの率直な質問に、感動したり、励まされたり、とても有意義なものでした。もし疑問な事があれば、専門家の先生に答えていただくという教育的プログラムを構築しているので、とてもおもしろく理解できたのではないのでしょうか。

地球縦回り一周の旅では、地球環境に意義を持っていただきたいというのが狙いです。地球環境問題は、一人一人の意識が大切であり、今後、各国にも働きかけ、この輪をさらに広げてゆくつもりです。皆様のお力添えをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

ありがとうございました。



地球縦回り事務局

代表 大場満郎

大場 満郎

概要

日程 2004年3月30日～2004年6月15日

目的

1. グリーンランド内陸氷床 2,500km を縦断（移動手段：スキーセーング・徒歩）。
2. グリーンランド内陸氷床縦断中、継続的に観測・調査を行い、収集したデータを分析することにより、オゾン層破壊による紫外線の影響や、グリーンランドの汚染状況、黄砂がグリーンランドに与える影響を調べる。
3. イヌイットの村（西海岸ベースキャンプ付近）に入り生活を共にすることで、イヌイットの生活様式・社会経済の仕組みを体験・学習する。
4. 1～3の過程を衛星携帯電話・ホームページを通して伝え、パイロット校の子供たちや多くの方たちと共に地球環境について話し合う・考える場を創っていく。

隊員

大場満郎ー内陸氷床 2,500km 縦断行。
長谷徹志ー内陸氷床 2,500km 縦断行。グリーンランド環境調査。
成果：2004年4月5日～2004年5月31日（現地時間）の57日間で2,315kmを縦断踏破。
宮下典子ーベース・キャンプ・マネージャー。
グリーンランド各地を移動してイヌイットの文化や生活を紹介。大場と長谷の北上に合わせてグリーンランド各地を移動。

専門家

荒木裕子専任講師（聖徳栄養短期大学）、岩坂泰信教授（名古屋大学）、岸上伸啓助教授（国立民族学博物館）、スチュアート ヘンリ教授（放送大学）、藤井理行教授（国立極地研究所）、的場澄人博士（国立環境研究所）

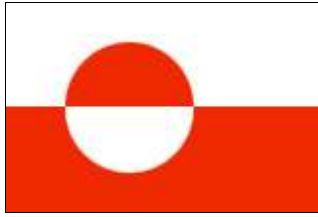
パイロット校

東京都千代田区立一橋中学校、埼玉県深谷市立深谷小学校、大阪市立新東三国小学校、横浜市立新吉田第二小学校、北海道白樺学園高等学校、山形県最上町立満沢小学校。
各パイロット校と衛星電話と使った、週一回のリアルタイム交信を実施。

ホームページ

地球縦周りホームページ：<http://www.global-edventure.net>
「隊員日誌」ー各隊員がその日の出来事などを綴る。
「たてまわり質問箱」ー多くの方から寄せられる質問に、隊員や各専門家の先生方が回答。

グリーンランド基礎データ



太陽とフィヨルドと氷床を表している

グリーンランドは日本の約6倍もの面積を有する世界一大きな島で、全長は南北に約2,700kmあり、内陸の約80%は厚さ最大3,000mの氷で覆われている。人口は約56,000人で、比較的気候の穏やかな西海岸に集中している。その大半は原住民族のイヌイットと北欧系ヨーロッパ人である。その中でも、先住民族のイヌイットは人口の88%を占め、今も尚、伝統的な漁猟中心の生活を営んでいる。デンマークから1979年に自治権を得ており、グリーンランドとデンマークの関係は、元植民地としては緩やかな関係で国連がモデルケースとして紹介もしている。

正式国名	Greenland (Grønland) もしくは Kalaallit Nunaat
面積	2,166,086 km ² (総面積) 410,449 km ² (非氷床面積)
全長	2,670 km (南北) 1,050 km (東西)
人口	56,854 人 (2004 年 1 月)
首都	ヌーク 14,350 人 (2004 年 1 月)
言語	グリーンランド語、デンマーク語、英語
宗教	キリスト教 (ルター派)
政体	立憲君主制 (議会制民主主義)、1979 年にデンマークから自治権を獲得
元首	マルグレーテ 2 世女王 (デンマーク王国)
首相	ハンス・エノクセン首相
主な産業	漁業 (主にエビ)、手工芸、毛皮、観光
主な貿易国	EU (特にデンマーク)、アメリカ、アイスランド、カナダ、日本
通貨	デンマーク・クローネ

(Statistics Greenland 「Key Figure of Greenland」 & Lonely Planet 「Greenland」 参照)

第一章 活動報告

隊員紹介

■ グリーンランド内陸氷床縦断行



大場満郎(写真左) グリーンランド編のプロジェクト・リーダーとして、チームを引率。グリーンランド内陸氷床 2,315km 縦断踏破に成功。

プロフィール 1953 年 1 月 10 日生まれ。51 歳。アースアカデミー大場満郎冒険学校主宰。冒険家として過去 20 年間、数々の偉業を達成。83 年、アマゾン川 6000km を筏で下る。97 年、北極海単独徒歩横断。99 年、南極大陸単独徒歩横断に成功。世界で初めて両極単独徒歩横断に成功し、第 4 回植村直己冒険賞を受賞。

長谷徹志(写真右) 大場満郎のエキスペディション・パートナーとして、グリーンランド内陸氷床に入り、環境調査を担当。大気・雪・紫外線を観測。特に、地球温暖化を考えるうえで無視することのできない黄砂粒子に注目し、分析している。

プロフィール 1977 年 3 月 9 日生まれ。27 歳。名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学在学中。

■ イヌイット民族文化体験レポート



宮下典子(写真右) ベース・キャンプ・マネージャーとして氷床の大場・長谷隊員をサポートする傍ら、グリーンランド全土を精力的に回り、イヌイットの伝統文化はもとより、環境問題・社会問題等、グリーンランドの様々な側面をレポート。

プロフィール 1976 年 2 月 26 日生まれ。28 歳。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒。

旅の軌跡



グリーンランド行を終えて 大場満郎



「暖かい」、グリーンランド内陸氷床のスタート地点に立ったときの正直な感想だ。

4月5日にグリーンランドの南端の町ナルサスワック空港から、氷河を足元に見ながらヘリコプターで氷床に飛んだ。標高は2,000メートルほどだ。でも4月ともなれば暖かく、気温はプラスの日もある。なんと霧雨が降るではないか。まさか雨が降るとは思っていなかったのでびっくりだ。

南からの海風が氷床にぶつかり、ガスを発生させ、視界が非常に悪く、ホワイトアウト状態になる。風も弱くスキーセーリングで進めない。風があったとしても目隠しをして進むようなもので、危険極まりない。しかたなく110kmほどの重いそりを引き、一步一步歩くしかない。でもすぐに進路がそれる。後方から長谷さんの声が飛ぶ。「右へ20度。少し左だ。」その声を頼りに進路を北へとる。氷床を上っていくと次第に内陸氷床特有のカタバ風が吹き始める。「待ってました」とばかりにパラセールを取り出す。東からの風なので、スキーのエッジを立て、北へ進路をとるのは、足腰が疲れ、かなりしんどい。長谷さんは初めての極地旅なので、不安と緊張の様子。誰でも初めての冒険ではそうだろう。でも慣れてくると、落ち着き、共に行動が出来るようになってきた。それまでは、転倒の連続で（400回以上転び）、心配で見えていなかった。風の無い日はがんばっても8kmほどしか歩けない。良い風と良い雪面、そして良い天気恵まれた日は、一日に100km進むのは簡単だ。最長で140km進めた日もある。ブリザードの強い日はテント内で一日過ごす。入り口を少しでも開けると風が吹き返し、雪が吹き込む。そりもテントも雪に埋まり、周囲は一変してしまう。



一日に7時間から8時間の行動だ。まず朝起きて、鍋に雪を入れ、お湯を作り、朝食のペミカンを食べる。外に出て用を足し、その後、完全装備で外に出て、そりに荷積みをして出発。お昼はチョコレートバータイプのペミカンを丸かじりして、お湯を飲みおしまい。一日のカロリーは5,700キロカロリーだ。夕方、テントを張り終えたら、中でお湯を沸かし、食事の準備をする。

長谷隊員は、大気のサンプリングや降雪サンプリングなどを行う。私も雪のpHの測定や雪温などを測り、毎日の日課とする。内陸氷床の雪のpH値は5~6である。ちなみに東京に降る雨はpHが4.8ということで、氷床の雪はとてもきれいで、毎日きれいな水を飲めるのに幸せ感を覚えた。氷床には生き物はおらず、雪ホオジロが一羽で、よく私たちのところに飛んできて、慰めてくれた。腹が白く背が黒い、スズメより一回り大きい小鳥で海岸付近に生息している小鳥とのことだ。時々、裸で外に飛び出して行き、スノーシャワーをやった。これがまた気持ちいい。柔らかな雪の上にねっころがり、体に雪をつけ、テントに戻り、タオルでごしごしやる。身も心もきれいになり、気分もすっきりする。

内陸氷床を移動するだけでは地球の温暖化を感じることは難しい。これは科学的な調査、観測を長期間行い、統計的なデータが必要であろう。でも旅を終え、町に入り、人々の話を聞いたり、自分の目で見て、実感することが出来る。今回シオラパーク（世界最北の村）の大島育雄さんに電話をして聞いてみた。大島さんはボートで漁をしていて、氷河が去年まであったところに今年は見当たらない（氷河の末端が溶けて後退しているとのこと）。海の氷の張りもここ5年ほどはとて悪い。70年代80年代は10月中旬に凍り、6月までしっかりしていた。だが、ここ5年ほどは、12月下旬から1月ごろに凍り、5月にはだめになってしまう。それで、漁師も海氷を犬ぞりで走る期間が短くなり、また、氷の上の狩猟が出来ず生計が立てられない状況になっているとのこと。しかたなく、骨や石で工芸品を作って販売したり、公務員に転職するなど、生活の変化を余儀なくされているとのことだ。また海の汚染も深刻で、DDTやPCB、農薬など、多くの化学物質が北極の海に流れ込み、北極圏の動物や人々に悪影響を与えていると聞いた。環境ホルモンが食物連鎖の上位にいるアザラシ、クマ、そして人間の体内を害しているとのことだ。科学物質を出さない国の人々が、痛みを被っているのは、納得のゆかない事だろう。今後も地球縦回りの旅を通して多くの方々と人間と自然の関わりを改めて見つめ直し、地球環境について学んでゆきたいと思う。

環境問題は、一つの国では解決できない。全地球市民（各国）が協力し、意識を高める必要がある。地球縦回りの旅は、まだ始まったばかりだ。第二弾の旅を準備中である。今度は、海外の隊員も募り、国際隊を編成したい。そして、各国にパイロット校を設け、異文化の理解や国際協力の基で、幅広い展開を計ってゆくつもりだ。

今回のグリーンランド行にご支援下さった方々に、心から感謝を申し上げます。今後も、皆様のお力添えをどうぞ宜しくお願いいたします。



グリーンランド環境調査 長谷徹志

今回のグリーンランド縦断中に、私は環境調査を行いました。その環境調査についてご紹介します。今回おこなった環境調査は**大気サンプリング**、**降雪サンプリング**、**紫外線調査**です。それぞれについてご紹介します。

大気サンプリング

大気サンプリングとは、ポンプを用いて空気を引き、捕集のメッシュ表面に粒子を衝突させることで、空気中にある小さな粒子を採取します。大きさは1mmの1/1000程の大きさの粒子です。この粒子を捕集したメッシュを持ち帰り、分析を行います。今回は46個のサンプルを持ち帰りました。



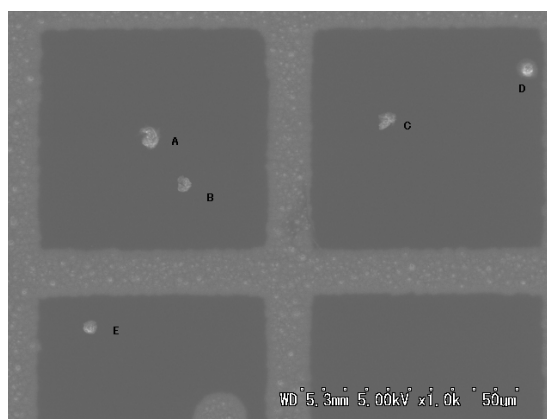
(大気サンプリングをする長谷)

分析は電子顕微鏡やX線分析器を使用し、粒子の形状やその成分を調べることで、大気の汚染状況などその時の大気状態を知ることができます。また、地球温暖化を考える上で無視することのできない物質として注目されている黄砂が、グリーンランドまで飛来することが知られており、この黄砂に注目し、分析を進めていく予定です。



(電子顕微鏡で観察中)

下の電子顕微鏡写真はスタートしたばかりの時にサンプリングしたものです。海岸の街から60km程しか離れていない場所でサンプリングしたため、石炭を使用した火力発電所から排出されるフライアッシュと呼ばれる粒子や海塩粒子などが検出されました。分析はまだこれからですが、どの様な結果が出るかとても楽しみです。



(電子顕微鏡写真 白く見えるのが粒子)

降雪サンプリング

国立極地研究所 五十嵐誠

グリーンランド氷床と南極氷床には、過去数十万年前から現在にいたる地球環境の変遷が詳細に保存されている。氷の安定同位体

(酸素および水素) 組成は、過去の気温変動に指標として用いられ、氷に含まれる様々な物質は、火山、海洋、生物、乾燥地などを起源とする環境指標物質である。氷の中の気泡には過去の大気保存され、二酸化炭素などの温室効果ガス濃度の変動を知る手がかりとなる。



(降雪サンプリング中の長谷)

グリーンランド氷床のドームサミットと呼ばれる頂上では、1992年にヨーロッパ連合(GRIP計画)とアメリカ(GISP II計画)は深さ3000mを超す岩盤までの掘削に成功し、一つ前の間氷期に達する約25万年分の氷コア試料を得ることに成功した。



(PH計で雪の酸性度を測る大場)

これらのコア試料には、氷期と間氷期の気候変動の特徴が詳細に記録されていたほか、産業革命以後に放出された大気汚染物質の濃度増加についての情報も保存されていることが報告されている。上記のような氷コア解析は地球の過去の情報を教えてくれるのに対し、縦回りプロジェクトに依頼した表面積雪採取は、グリーンランド周辺の現在の大気環境情報を得るための重要な手がかりとなる。雪粒は大気中に含まれる様々な物質を取り込んで氷床上へ落下してくるので、氷床表面にある雪を調べれば現在の大気環境を知る貴重な情報源となるのである。特に今回のプロジェクトでは、動力を使わず氷床を縦断するので、試料採取時の汚染がなくグリーンランド全域にわたるほぼ同時期の情報が得られる貴重な機会である。大場さんと長谷さんが苦勞して採取してゴールまで運んで頂いた雪試料から、どのような分析結果が得られるのか私自身も楽しみである。残念ながら、この拙文を執筆時には全ての分析を終了することができなかったのもので、皆様には報告会の時に解析結果をご紹介します。

紫外線調査

紫外線は、目には見えませんが、様々な影響をもたらします。強い日差しの下での日焼けは、誰も経験するところです。また、洗濯ものを日光に当てることで、多くの細菌やカビなどを殺菌することができます。近年、我々が放出したフロンなどの化学物質がオゾン層を破壊していることが大きな地球環境問題となっています。その結果、地上に降り注ぐ紫外線の量が増え、皮膚のシミ、シワ、老化、癌化や、免疫力の低下などの健康への影響とともに、動植物の関わる自然生産性、などが危惧されています。



(紫外線調査中の長谷)

今回の紫外線調査では、枯草菌という菌を使い、調査しました。枯草菌はひろく分布している土壌細菌で、納豆菌の仲間です。この枯草菌をスポットしたスライドを太陽が一番高い12時に15分間太陽光に曝し、その後実験室に持ち帰って、どれだけの胞子が生き残ったかを測ります。その生残率が、紫外線の強さを表すことになります。



(枯草菌スライドを使った紫外線観測)

観測には2枚のスライドを使用し、太陽からの直接光と雪面から反射する光の2種類を計測しました。また今回の観測では38サンプルのデータを持ち帰りました。氷床上では日中はゴーグル無しにはとても行動できない状態でしたし、雪面からの反射がかなり強い印象を受けました。東京や南極など他の地域と比較してどれくらい紫外線が強いのか、これからの分析でどのような結果が出るか楽しみです。

今回の旅を通じて

グリーンランドでの生活は大場さんにとっては慣れたものでも、私にとって厳しいものでした。また、スタートに立つまで、恐怖感や言い様のない不安感だらけでもありました。そんな中グリーンランドへ行ってみたいという好奇心がその不安感や恐怖心に勝ったため、スタート地点に立ったというのが正直なところです。前半戦は緊張のため、体が思うように動かず、大場さんに迷惑をかけました。その後も装備の故障や膝の痛みなど、様々なトラブルがありましたが、大場さんのリードと多くの方からの応援で無事ゴールすることができました。また週一回のパイロット校との交信は、単調な生活の中で大きな楽しみの一つでした。小中学生の元気な声を聞くだけで、こちらまで元気を頂きました。また今回の成功は、応援して下さいましたスポンサーの方々、パイロット校の皆さん、ホームページを通して見守って下さった方々のお陰だと感じております。本当にありがとうございました。



また、今回の観測に関わって下さった皆様に、心よりお礼を申し上げます。

名古屋大学教授の岩坂泰信先生には、観測だけでなく、多方面から様々なアドバイスを頂きました。また研究室の松木篤さん、山田丸さん、宮沢武志さんには観測の準備段階で大変お世話になりました。国立極地研究所の藤井理行教授、五十嵐誠さんには、降雪サンプリングの機材提供や観測のご指導をいただきました。立教大学の宗像信生先生には、紫外線調査へのご協力、ご指導をいただきました。また、国立環境研究所的場澄人さんには極地での観測、生活等の様々なアドバイスを頂きました。本当にありがとうございました。

また今回の観測はまだまだ分析段階ですが、環境改善や環境意識の高まりにつながればと、今後さらなる分析を進め、ホームページ、学会、論文等で発表していく予定です。今後ともよろしくお願いいたします。

イヌイト民族文化レポート 宮下典子

透明な清々しい空気、白い雪を頂いた山脈、氷の浮かぶ海。グリーンランドの南の玄関口、ナルサスアックの空港でタラップを降りた瞬間、私は、グリーンランドが好きになりました。日本、グリーンランド、数多くの方々に助けられて、ベースキャンプの活動、グリーンランド・レポートを無事終えることが出来ました。心から、ありがとうございました。

グリーンランドでの主な活動

4/5 ナルサスアック Narsarsuaq  氷床(スタート地点)	・ ユース・ホステルにて氷床縦断の準備 ・ ヘリコプターのパイロットとの打ち合わせ ・ 氷床へ。大場、長谷隊員と別れ、ヘリコプターでナルサスアックへ戻る。 ・ ユース・ホステルにて装備等の後片付 ・ 補給物資の送付（ウマナックへ） ・ ナルサスアック散策 ・ カフェミット（バースデーパーティ）に参加	 ブルーアイス  マッタック(鯨の皮)
4/10 カコトック Qaqortoq 	・ イースター（キリスト教の行事）のパーティ ・ 博物館見学 ・ 建設中の新しい博物館見学 ・ Great Greenland（グレート・グリーンランド）毛皮工場見学 ・ カコトック散策	 カコトックの野外彫刻
4/15 ナルサスアック Narsarsuaq	・ オーロラの夜 ・ 物資の送付（カンゲルスアックへ） ・ 船で氷河の河口までセーリング ・ グリーンランド式ランチパーティ	 オーロラ
4/19 ヌーク(首都) Nuuk 	・ ホーム・ルール(議会)訪問 ・ ハンス・エノクセン首相に面会、メッセージを頂く ・ レストラン「ニピサ」取材 ・ 環境ホルモンを研究している医師、ペデルセン先生にインタビュー ・ National Institute of Natural Resources ・ 国立博物館 ・ テレビ出演（19：30～の夜のニュース番組） ・ ヌーク観光局 ・ グリーンランド政府観光局 ・ パイロット校交信（深谷市、横浜市） ・ 文化ホール（Katuaq）にて、グリーンランド女性ポップグループ「セドナ」コンサート	 ハンス・エノクセン首相  コンサート
4/24 タシーラク Tasiilaq 	・ グリーンランド在住の日本人、佐紀子ダオラナさん ・ 博物館 ・ ドラムダンス ・ グリーンランド人画家ブーティのアトリエ訪問 ・ タシーラク観光局	 ブーティの作品

4/28 クルサクク Kulusuk	・ ドラムダンス ・ パイロット校との交信（深谷市）：ドラム・ダンスー、アンナが電話上でイヌイットの歌を歌う ・ 東グリーンランド伝統の木彫りのマスク取材	 ドラムダンス
5/1 カンゲルスアック Kangerlussuaq	・ トレッキング ・ ジャコウウシ見学 ・ 補給の準備開始	 ジャコウウシ
5/4 ウマナック Uummannaq 	・ 補給物資の調達 ・ エア・グリーンランドとの打ち合わせ ・ パイロット校との交信（深谷市）：グリーンランド・ハスキーの遠吠え ・ 「子供たちの家」でのカフェミックス ・ 犬ぞり初体験（ウマナックの島を一周） ・ 氷床へ補給（片道1時間20分） ・ イッカク漁に出かけるハンターたちと、犬ぞりでのハンティングに便乗。氷上のテントで一泊。あざらし漁、肉の解体、生肉などを体験する。 ・ ヌツォア半島の村ニャーコンネ（人口約60人）に滞在。 ・ ニャーコンネの学校（児童数9人）	 犬ぞり
5/12 ニャーコンネ Niarqornat		 サメの軟骨のボール 「ナタッコ」
5/17 ウマナック 	・ デンマークから今年最初の船が、氷を割りながら物資を積んでやってきた。 ・ ウマナックのハート型の山の裾野をトレッキング ・ 寿司パーティ ・ カフェミックス ・ 学校訪問（5/21, 5/24） ・ パイロット校交信（深谷市）	 元気な小学1年生のクラス
5/24 イルリサット Ilulissat	・ クヌド・ラスムセン博物館 ・ 犬ぞり冒険家オーノ・フライシャーにインタビュー	
5/26 カーナーク Qaanaaq 	・ 氷床隊ピックアップの準備 ・ 新聞に犬ぞりの旅の記事が掲載される。 ・ 学校訪問（校長先生にインタビュー） ・ Hingitaqのリーダー、ウーハッカ・クヤンギチョックにインタビュー ・ コンファーマーション（Confirmation） ・ カフェミックス ・ 魚釣り ・ ピックアップ。ケンボレック航空のツインオッターにて氷床へ（片道2時間半） ・ 大島育雄さんのご家族、長女のトク・オーシマに協力して頂く。 ・ 装備類をコペンハーゲンに送付	 最北地方の民族衣装
6/10 イルリサット		 ニッコリーナ （大島さんのお孫さん）
6/11 カンゲルスアック	・ ホテル・アーケティックに一泊 ・ ホテル・カンゲルスアックに一泊 ・ 装備類をコペンハーゲンに送付 ・ カンゲルスアックを出発、コペンハーゲンへ	

旅の終に



グリーンランドは、人間が生きるのに楽な土地ではない。しかし、イヌイットの祖先達は、およそ4000年から5000年前に、生きるためにこの土地へやってきた。そして、生き残るために知恵を使い、その土地で獲れるアザラシを食べて生きる狩猟文化を生み出した。

かつて、イヌイットの男にとっては、偉大なハンターになることが唯一にして最高の人生だった。そして女たちはハンターの妻となり、子供を育てることが生きることのすべてだった。

しかし、ここ50年の間の急激な近代化で、伝統的な狩猟文化は変化を余儀なくされている。北極圏に位置する世界最大の島、グリーンランドも、世界の様々な潮流と無関係ではいられない。

1950年代に入ってきたアルコールは瞬く間に広がり、飲酒の習慣のなかったイヌイット文化は、アルコールに起因する諸問題に初めて遭遇することになった。

1980年代に起こった動物愛護運動の影響で、アザラシの毛皮の値段が暴落し、ハンターは狩猟で現金収入を得て生活していくことが難しくなり、漁業、その他の副業にも携わるようになった。また、地球環境の変化で、ここ数年は海の氷のはりが悪く、主に狩猟で生計を立てている東グリーンランドと最北地域は、このまま温暖化が続くと、さらに厳しい状況に立たされることになるという。

氷床縦断の補給のために滞在した、グリーンランド北西部の島、ウマナックでは、偶然、Ice Schoolというプロジェクトと出会うことができた。ウマナックには、「子供たちの家」という、アルコール中毒や虐待、育児放棄、近親者の自殺などで、心身に深い傷を負った子供達が親元から離れて暮らす施設がある。4才から19才までの、30人ほどの子供たちが暮らす、このウマナックの「子供たちの家」が行っているのがIce Schoolという独自の活動だ。

10年前に始まったこのプロジェクトは、海が凍る犬ぞりの季節（2月から5月）に、地元のハンターたちと一緒に、犬ぞりで狩猟の旅にでかける。ハンターたちと密着して過ごす旅の中で、子供たちは、伝統的な漁猟の技術、氷上で生きる知恵を学びながら、様々な経験を通して、自分自身の人間として誇りを取り戻していく。いったん負った心の傷が消えることは難しくても、その傷を乗り越えていける「生きる力」を養うためには、千の理屈よりも、生きた経験が役に立つに違いないとIce Schoolは信じている。

私は幸運にも、このIce Schoolと出会い、ハンター達と数日間過ごした。仕留めたばかりのアザラシのしっとり濡れた毛皮のなま暖かさ、犬ぞりの上にゴロンと置かれ、ソリが揺れるたびに落ちそうになるのを必死で抱えたときの、アザラシのヒゲの感触、肉体の生々しさ、そしてそのアザラシが鮮やかに解体されていくとき、白い氷の上を染めた真っ赤な血、そしてその場で食べた生の肝臓の新鮮さ。

その一連の流れは、私にとって決して奇異なものではなかった。そのとき私を包んでいたのは、人間はこうやって生きてきたのだという素直な感動だった。

日本に帰ってきて、過剰なまでの便利さ、物質的豊饒さの中に舞い戻って、しばらくは迷子のような顔をしていたような気がする。余りにも用意された環境の中にと、自分の創造力、そして想像力を働かせる余地がない。これは、とても淋しいことだ。だから、ときどき、グリーンランドの凍った海がたまらなく恋しくなる。

広大な氷原を犬ぞりで駆けるとき、精神は自由に踊り出す。犬たちの息づかいを聞きながら、冷たい安らぎに包まれると、命の奥から、ふつふつと静かな興奮が沸き上がってくる。

グリーンランドは確かに冷たい氷に覆われているし、一年の大半は寒い冬に支配される。けれど、その寒さの中で感じる、人々のぬくもりは計り知れない。氷った海の上で感じる、人間の存在のあたたかさ。そこに人がいてくれることが、心をあたためてくれること。

グローバル化の波の中で、危機に瀕しているグリーンランドの狩猟文化について考えるとき、自分のおかれている文化にも思いを巡らさずにはいられない。長い間、私たちの祖先がどうやって生きてきたか。そしてこれから、どうやって生きていくのか。

私は、そこに生きている人間の在り方そのものが文化だと思う。果たして私たちは、豊かな文化の顔をしているだろうか。世界に誇れる顔をしているだろうか。

グリーンランド最北の村シオラパルクに暮らす大島育雄さんは、グリーンランドに暮らして30年。グリーンランドで最高の毛皮は、大島さんの手によるものだという。大島さんは最高のハンターとして、グリーンランドの人々の尊敬を集めていた。世界にはいろんな生き方があって、望めばグリーンランドでハンターにだってなれる。そんな多様性と、一人一人の人間の可能性を伝えることが出来るのが、Global EdVentureだと思う。

おそらく、今回の旅で、一番、学びの機会を与えられたのは、隊員であった長谷さんと私だけに違いない。ここで告白すると、この旅に参加するまでは、環境問題の深刻さについて、なかなかピンとこなかった。本を読んでも、ニュースで取り上げられても、頭では理解しても、沸きあがる衝動というものがなかった。それが、グリーンランドの壮大な氷床、氷河、ブルーアイスの景色を空から見たとき、心が化学変化を起こしたかのように、地球がかけがえのないものだという思いが、なんのためらいもなく心にストンと落ちてきた。

戦争という最悪の環境破壊など、地球を取り巻く問題は数限りないけれど、同じ時代、同じ星に、たまたま生まれ合わせた人間同士、つながり合うすべを探していきたい。一人ずつ、一歩ずつ、世界がつながっていけばいいと思う。



6月末、グリーンランドからe-mailで届いた夏の景色

パイロット校との交信記録

学校名	第1回目	第2回目	第3回目	第4回目	第5回目	第6回目	第7回目	第8回目	第9回目
千代田区立一橋中学校 2年生-選択理科	4/22(木) 7:50～8:00 大場・長谷	4/30(金) 7:50～8:00 大場・長谷	5/6(木) 7:50～8:00 大場・長谷	5/13(木) 7:50～8:00 大場・長谷	5/20(木) 7:50～8:00 大場・長谷	5/27(木) 7:50～8:00 大場・長谷	6/3(木) 7:50～8:00 大場・長谷	6/10(木) 7:50～8:00 大場・長谷・宮下	
深谷市立深谷小学校 6年生-総合的な学習の時間	4/16(木) 8:50～9:00 大場・長谷	4/22(木) 8:50～9:00 大場・長谷	4/30(金) 8:50～9:00 宮下	5/6(木) 8:50～9:00 宮下	5/13(木) 8:50～9:00 大場・長谷	5/21(金) 8:50～9:00 宮下	5/27(木) 8:50～9:00 宮下	6/3(木) 8:50～9:00 大場・長谷	6/10(木) 8:50～9:00 大場・長谷・宮下
大阪市立新東三国小学校 5、6年生-総合的な学習の時間	4/16(木) 9:05～9:15 大場・長谷	4/22(木) 9:05～9:15 大場・長谷	4/30(金) 9:05～9:15 大場・長谷	5/6(木) 9:05～9:15 大場・長谷	5/14(金) 9:00～9:10 大場・長谷	6/4(金) 9:00～9:10 大場・長谷	6/11(金) 9:00～9:10 大場・長谷		
横浜市新吉田第二小学校 6年生-社会	4/16(木) 9:20～9:30 大場・長谷	4/22(木) 9:50～10:00 宮下	5/13(木) 9:20～9:30 大場・長谷	5/21(金) 9:20～9:30 宮下	6/4(金) 9:20～9:30 大場・長谷	6/11(金) 9:20～9:30 大場・長谷・宮下			
最上町立滝沢小学校 5、6年生-総合的な学習の時間	5/20(木) 9:05～9:15 大場・長谷	5/27(木) 9:05～9:15 大場・長谷	6/3(木) 9:05～9:15 大場・長谷	6/10(木) 9:05～9:15 大場・長谷・宮下					
白樺学園高等学校 2年生-地理総合B 3年生-選択地学	5/20(木) 9:20～9:30 大場・長谷	6/3(木) 9:20～9:30 大場・長谷	6/10(木) 9:20～9:30 大場・長谷・宮下						



第二章 参加者の感想

パイロット校

まず、冒険をしている本当に大変な時に、一つ一つていねいに質問に答えて下さった事、心から感謝しています。本当にありがとうございました。自分はパイロット校の代表として、実際に大場さんと話をさせていただいた1人です。大場さんと話をした人達にはそれぞれの感想があったと思いますが、お礼の意味も込めて、自分が大場さんと話して思った事、感じた事をお話したいと思います。

正直、自分は理科の授業で話を聞くまで、大場さんの事も、大場さんが世界一周に挑戦している事も知りませんでした。パイロット校に選ばれ、実際に話をしてみようと思ったのも、ちょっとした好奇心からです。ですから、始めは大場さんの事を、「世界一周なんてすごい事するくらいだから、すごい体つきのおっかないおじさんなんだろうなあ・・・。」なんて、とても緊張してしまいました。そしていざ当日。気を引きしめて、電話に出てみると、どうでしょうか？電話越しに自分に話しかけている人の声は、想像とは全く違う、とてもあったかくて、優しくて、しかしどこかに力強さを感じさせる、そんな声だったのです。身がまえていた自分にとっては、まさに「寝耳に水」というやつで、その後の時間は、本当にあっという間に過ぎ去ってしまいました。

「どうして大場さんはこんなにすごい事ができるんだろう？」帰ってから、ずっと考えていました。なぜなら、声を聞いても、写真を見ても、大場さんが特別な人間だとは思えなかったからです。自分に写った大場さんは、「気さくで、明るくて、とてもよく話す優しいおじさん」そんな感じです。自分も大場さんも、しいては世界中の人間は、平等で何の違いもない、同じ人間のはずなのに、どうして大場さんだけがこんなにすごい事に挑む事ができるのでしょうか？そんな事をずっと考えて、大場さんにあって自分にない物に気付いたのです。それは「勇気」と「努力」です。というのも、大場さんがこんな事に挑戦する事ができたのは、まず勇気をもって「やってみよう！！」と決意し、それに向かって努力したからだと思うのです。ふつう、世界一周にかぎらず、ちょっと大きな事にぶつかる人は「できっこないよそんな事」なんて、あきらめる事が多いのではないのでしょうか？自分も例外ではなく、「あー無理」なんて言って、やってもいないのに勝手に自分の能力の限界を決めてしまったりする事は、しばしばあります。しかし、それは裏を返せば、自分で自分の可能性の一つ一つ自分の手でつぶしてしまっている事になるのではないのでしょうか？もしかしたら、自分だって大場さんのように世界一周に挑戦できる可能性があるかもしれないのです。総理大臣にも、宇宙飛行士にも、何にだってなれるかもしれない。たとえなれなくたって、それを「目指す権利」はだれにでも平等に与えられているのです。やってみる事の大切さ、そして、自分の中の可能性に、大場さんは気付かせてくれました。ですから、本当に大場さんと話せてよかったと思っています。

最後になりますが、自分も生まれてから、いろんな所に行き、いろんな道を歩いてきました。しかしそれらは、すべて人が作ってくれた物です。だれかが歩いた道だから、安心して歩く事ができるのです。でも大場さんの歩く道は、一歩先、二歩先で死ぬかもしれない、そんな道なき道です。これから何度も、その道につまづき、くじけそうになるかもしれませんが、しかし忘れないで下さい。大場さんの一歩一歩には、それぞれとても深い意味があるし、とても大きくて大切な事を、たくさん自分達に教えてくれるのです。だからできる事なら、歩く事をやめないで下さい。最後まで、あきらめないで下さい。旅の成功を心から願い、大場さんが地球縦回り一周の偉業を成しとげるまで、陰ながら応援し続けたいと思います。本当に、ありがとうございました。

大場さんが本校で報告会を兼ねた特別授業をするため来阪される。
ところが当日、大場さんを乗せた新幹線は豪雨のため静岡あたりで停止。
残念ながらこの日の特別授業は延期となった。
グリーンランドを縦断した大場さんだが、大阪への道のりは遠かったのかも知れない…。

延期となった特別授業は、夏休み直前の7月16日（金）に行った。
しかし生憎この日は市民検診のため講堂が使えない。
場所を急遽、多目的室に変更した。
ところが多目的室では、5・6年生170名は収容しきれない。
そこで5年生と6年生を分けて、それぞれちがう時間に特別授業を受けることにした。
5年生は3時間目、6年生は4時間目としたのである。

大場さんの特別授業が始まった。
大場さんの面白話はもちろん、30枚のスライド写真にも魅了された子どもたち。

氷の世界のグリーンランド。
宮下さんや長谷さん。
太陽電池。
スノーセーリングで滑走する大場さん。
そしてサスツルギのスライド。

「みなさんに問題を出します。サスツルギとは何でしょう」
グリーンランドにいる大場さんが衛星電話で出題したことがあった。
辞書を引いても「サスツルギ」なんて載っていない。
何なんだろう、「サスツルギ」って？
翌週、子どもたちは大場さんから「サスツルギ」の解説を電話で聞いた。
なるほど、そうなのか。

そういったこともあり、今回、スライドでサスツルギを見たときは、
ああ、あれがサスツルギだ、と思った子どもが多かったに違いない。
身振りを交えた大場さんの熱弁とスライドでもって、
グリーンランドの旅をくっきり迫体験できた特別授業であった。

特別授業の後、大場さんを教室へ招いた。
子どもたちと一緒に給食を食べていただくというわけだ。
教室には8班の席がある。
どの班で食べていただく。
「大場さんと一緒に食べたい子」
そう言うと全員が手をあげた。
どの子ども大場さんと一緒に食べたいのであった。

迷ったあげく真ん中の3班で食べていただくことにした。
大場さんが小学生のころは給食ではなく弁当であったそうだ。
納豆弁当をストーブであたためると、教室は納豆の匂いでいっぱいになった。
そんな愉快的話を聞きながら子どもたちは大場さんと楽しい一時を過ごせた。
大場さんも初めての給食にたいへん満足されていたようだった。

子どもたちの感想

- スライドショーの写真はとてもきれいでした。
-31℃でも暖かいと聞いてびっくりしました。
- サスツルギはうすいものからぶあついものまであって、
たこをもってすべっていて気持ちよさそうでした。
- わたしは大場さんの話を聞いていると、
ちょっとグリーンランドに行ってみたいと思いました。
- 「イヌイットの人たちは日本人に似ている」と聞いて
ぼくは会ってみたいと思いました。
- ペミカンはおいしかったです。
サスツルギは波みたいな地面なのでびっくりしました。
- 給食のときにグリーンランドの人は日本語とにている言葉、
と聞いてびっくりしました。
- 私の班で給食を食べてくれて、うれしかったです。
また、電話でお話をしたいと思います。

「地球縦まわり一周の旅」 パイロット校として参加して

千代田区立一橋中学校長 村上みな子

世界的な冒険家大場満郎さんとは、昨年、本校の感動体験学習の講師としてお招きし講演をしていただいたことをご縁に今日に至っております。20年にも及ぶ北極・南極両極単独歩行による横断の旅を成し遂げた大場さんのお話は、まさに「不可能への挑戦」と題しスケールの大きなものでした。夢をもたない、夢をもてない若者達といわれるなかで、大場さんは生徒達に大きな夢と感動を与えてくれました。そして、感動の余韻が覚めやらぬ時に、地球縦回り事務局から連絡があり「地球縦まわり一周の旅」プロジェクトにパイロット校として参加させていただくことになりました。そこで、環境教育を推進している本校の実情を考慮し、2年理科の選択授業の生徒達が中心となって、地球環境に関するデータをいただきながら調べ学習を進めることになりました。毎週、7時50分から8時まで、校長室において、担当生徒達がグリーンランドからの交信に心おどらせ、貴重なお話やデータをいただき、それらをまとめ、さらには調べ学習の成果として校内に掲示しました。

このような貴重な体験学習の機会をいただき心から感謝いたします。

以下、担当した教諭・生徒達の声を紹介いたします。

◆私が初めて大場さんにお会いしたときの印象は「人間味あふれた方」でした。

そんな大場さんが、私にとって、未知の世界であるグリーンランドについて、毎週様子を伝えてくれ、グリーンランドに興味が深まりました。大場さんのお陰でたくさんを知りたいという気持ちがでてきました。次の冒険も人間味あふれた大場さんらしくがんばってください。（齋藤千万）

◆私は外国についてほとんど知りませんでした。そのため、グリーンランドという日本とは全く違う国はとても新鮮でした。日本以外の国を調べて、わからないことを知っていく楽しさが分かりよかったです。（田部瑤子）

◆先日、大場さんに来校していただき、隊員日誌だけでは分からないことを話してもらい、とてもよく分かり、うれしかったり、楽しかったりでした。本当にありがとうございました。また、次の旅の時も一橋中に来て下さい。（上西洸毅）

◆地球縦まわり一周の旅のパイロット校の生徒として、グリーンランドについて調べました。とても楽しくいろいろと日本と違う国を調べることができました。また、楽しかったことといえば、もちろん、大場さんとの電話通信でした。とても貴重な体験をさせていただき感謝しています。（居城香南）

◆大場さんの交流会を通して思ったことは、人と人とのコミュニケーションのとり方が大切だと思いました。色々な経験をしている大場さんは、初めての長谷さんに教えなきゃという考えをもち、長谷さんは、その考えをもとに考えこんで泣き出したという話を聞いて、二人で行くのだから、息を合わせたり、心を一つにしたりするためのコミュニケーションの大切さを学びました。（松本篤彦）

◆地球縦まわりという世界的なプロジェクトに少しでも参加できてうれしい。マンガや本の中の世界をそのまま聞いているような大場さんとの交信は毎週楽しみでした。世界の大きさ、まだ、自分は何も知らないと思い知らされました。（川瀬未璃奈）

◆パイロット校として参加させてもらい、今まで知らなかったグリーンランドのことや、環境問題のことなどたくさん学ぶことができました。それだけでなく、隊員の皆さんには努力することや夢に向かってがんばることも教えてもらい勇気ももらった気がします。私もこれから何事も努力をしていきたいと思います。大場さんたちも頑張って、地球縦周りを続けてください。（木城芙弓）

◆「地球縦まわり」での大場さんとの交信をする中で、同じ地球上でも全く異なる世界にふれ、生徒の学習に広がりが出てきていることを感じます。環境問題など肌で感じることのできる学習ができたことに感謝しています。（選択理科担当教諭 星川健子）



交信しポート

埼玉県深谷市立深谷小学校

特別号

H16.7.25

私たちは、グリーンランド冒険中の大場さん、長谷さん、宮下さんとスタートした時からゴールした時まで、10回（9日間）の交信をしました。初めは何をどのように話したらいいのかわからなかったのですが、交信を重ねるうちにいろいろな質問が出てきて、それを大場さん達にお聞きするのが楽しみになりました。その時の私たちの感想をいくつか紹介します。

交信の中で、3人の方からたくさんのメッセージをいただきました。また、ゴールしたとき大場さんが「地球って小さいな、有限なんだな」とおっしゃいました。それらの言葉を私たちは強く複雑な思いで受け止め、今、「総合的な学習の時間」に環境問題について調べたり、いろいろな方々から環境についてのお話を伺ったりしています。これからも私たちの地球のことを考えていくつもりです。



コンピュータ室での交信の様子

交信記録

第1回	4月16日	大場さん・長谷さん
第2回	4月22日	大場さん・長谷さん
第3回	4月30日	大場さん・長谷さん
第4回	4月30日	宮下さん
第5回	5月6日	宮下さん
第6回	5月13日	大場さん・長谷さん
第7回	5月21日	宮下さん
第8回	5月27日	宮下さん
第9回	6月3日	大場さん・長谷さん
第10回	6月10日	大場さん・長谷さん・宮下さん

時間 8:50~9:00

場所 コンピュータ室

みんなの感想

1回目の交信から（本当にグリーンランドにいる人と話ができるのか信じられない気持ちだった。）

- *とても寒そうなところにいるのに、ものすごく元気なのがすごいと思った。
- *食事の時間にも同じものを食べていると聞いて、あきないのかなと思った。
- *オーロラはグリーンランドのどこでも見られると思っていたけど、北極圏でないと見えないとわかった。

6回目の交信から（大場さんも長谷さんも補給を受けてうれしそうだった。）

- *大場さんは、生のリンゴを食べたことを子どものように喜んでうれしそうに話してくれた。
- *生のリンゴやラーメンなどいろいろな種類の食べ物を食べられることのありがたさがわかった。
- *グリーンランドの国旗と日本の国旗が似ていることにビックリした。
- *風の強いときには、1日に100kmも進むと聞き、パラセールってすごいと思った。

7回目の交信から（宮下さんがアザラシの肝臓を生で食べておいしかったと言ったのには驚いた。）

- *グリーンランドの人たちは、食べるためにアザラシを捕ることを知った。人間は、生き物の命をもらって生きていくから食べ物は残さずに食べたいと思った。
- *宮下さんが、何回もしたくなるくらい犬ぞりドライブは楽しいと言っていたので、僕もやってみたくなった。
- *犬ぞりの操縦は、8年やってもまだ未熟だと聞いて、難しいんだなと思った。

8回目の交信から（宮下さんからウマナックの小学校の様子をお聞きました。）

- *同じ6年生が、2クラスあわせて24人くらいと聞いて、とてもビックリした。
- *勉強していることは、国語や歴史など日本と同じ教科を勉強していることがわかった。また、私たちと違って男女別の授業があったり、宗教の授業があることもわかった。
- *日本とグリーンランドは違う文化をもっていて、それぞれ大切にしているんだなと感じた。

9回目の交信から（ゴール直後でとてもうれしそうだった。グリーンランド氷床から最後の交信だった。）

- *大場さんの声からも、長谷さんの声からもゴールしてうれしそうなお話が伝わってきた。
- *大場さんは南極や北極に行っているのだから、こんなに広い地球のことを「小さい」と感じたのだからやっぱりすごいと思った。長谷さんは、「広い」と感じ、同じ地球でもその人の経験によっていろんな感じ方があるんだなと思った。
- *長谷さんは、ゴールしてとてもうれしそうだったが、まだ氷床にいたいとも言っていた。複雑な気持ちが少しわかるような気がした。

10回目の交信から（最初で最後の3人そろっての交信だった。グリーンランドから最後の交信だった。）

- *大場さんからは、苦しいこともあるけれど、楽しいこともある冒険のことがわかった。
- *長谷さんからは、グリーンランドの空気のことや環境のことがわかった。
- *宮下さんからは、グリーンランドの文化や民族のことがわかった。
- *3人の方々にまだまだ聞きたいことがあるので、今度深谷小に来るときまでに今までの交信から質問をまとめてたくさん話してみたいと思った。
- *ホームページの写真を見て、大人になったらグリーンランドに行って、写真と同じ景色を見たいと思った。

1. パイロット校として参加した目的

子どもたちは5年生の時、国語や社会で環境問題について学習した。調べ学習の他に、身近な環境調べや環境会議を開き、ポスター作りなど自分達のできることから実行した。また、地域に昔からいる新吉田メダカの保護を通して、様々な生き物が共生できる環境作りに向けて活動してきた。

しかし、地球規模の環境問題については知識で理解しているものの、自分たちの生活となかなか結びつけられないところがあった。そんな時新聞記事で今回の企画を知り、大場さんと交信することで環境問題をより身近な問題として意識できるのではないかと考え、パイロット校として参加することになった。

2. 具体的な取組

社会の時間に、国際理解の一環としてグリーンランドに関することを調べ学習し、分からないことやもっと知りたいことをまとめ、交信の時に質問した。大場さんには内陸氷床の様子や生き物のこと、宮下さんにはイヌイットの文化や環境問題について質問した。

ブリザード・サスツルギ・白夜など、内陸氷床は日本の環境とあまりにも違うので、子どもたちはとても驚いていた。また、そういう環境の中を自分の力だけで進む大場さんたちにも感激していた。しかし、内陸氷床は一面真っ白な世界であり、生き物もほとんどいないので、子どもたちからなかなか質問が出なかった。また、電話だけの交信で画面がなかったので、話の内容が分かりにくく、全員が集中して聞けない部分もあった。さらに、内陸氷床での交信からは環境問題が見えてこないこともあり、なかなか深まらなかった。

逆に、宮下さんのレポートには、イヌイットの人たちの生活や文化がたくさん紹介されており、子どもたちにとって分かりやすく日本の生活とも比較しやすかった。グリーンランドという環境と共生する人々の生き方が伝わってきて、日本の豊かな生活を振り返ってみる一つの機会になった。また、雌雄両性の白熊の話や、他の国からの汚れて海や生き物が汚染され、人間も何代か後に子どもを産みにくい体になるかもしれないという話は興味深かった。遠い国グリーンランドと日本のつながりが見える問題だった。

3. 交信を終えて

今回の交信で見えてきた環境問題は地球温暖化や海洋汚染などだった。しかし、それが遠い話ではなく、自分たちの豊かな生活が起因していることに気付くことができた。今子どもたちは、学校の目の前にある早渕川で様々な学習活動を行っている。生き物がいっぱいいる大好きな早渕川の環境を守るためにも、グリーンランドなどの極地や地球全体の生活や環境を守るためにも、これから自分たちはどうしていったらいいか、どんなことができるか考えていきたい。そして、身近なところから活動していきたい。

大場満郎さん

グリーンランド縦断

満沢小学校
5・6年生より

成功おめでとう!!

ぼくは、大場さんから衛星電話で、モンゴロイドのことやグリーンランドのことを教えてもらっていい経験をしたなあと思いました。ぼくは、グリーンランドのことを、これからも調べていきたいです。

(6年 菅 大也 (ひろや))

ぼくは、大場さんがグリーンランド縦断でボロボロにならないと言っていたので、すごいと思いました。

(6年 佐藤 雄也)

僕は、大場さんから色々なことを聞いて、すごいと思ったことは、グリーンランドにも鳥がいるということでした。

(6年 佐藤 隆則)

総合学習でイヌイットのことやグリーンランドのことを調べていて、そのことを詳しく聞けて勉強になったし、良かったです。(6年 菅 智香)

私は、大場さんと、衛星携帯電話で話をして、自分が聞きたかったイヌイットのことなど、たくさん教えてもらって、とても勉強になりました。(6年 岸 江梨奈)

ぼくは、大場さんからグリーンランドの環境問題やイヌイットのことを教えてもらいました。大場さんは分かりやすく説明してくれたので良かったです。(5年 菅 良太)

ぼくは、大場さんからグリーンランドの環境問題について教えてもらいました。大場さん、ありがとうございます。(5年 福井 大貴(たいき))

大場さん、896kmもあるグリーンランドを縦断してすごいなあと思いました。(5年 阿達 大空(ひろく))

ぼくは、大場さんがグリーンランドであったできごとをいろいろ聞けて良かったです。よく分かったことは、ペミカンがあまりおいしくなかったことです。(5年 佐藤 寛明)

わたしは、大場さんがグリーンランドのことを教えに来てくれたとき、「イヌイットの学校は、どんな様子ですか。」と聞いたら、とてもくわしく教えてくださいました。イヌイットの学校と満沢小学校の違いがわかって良かったです。(5年 結城 彩香)

私は、「自分のやりたいことはやり通す。」ということを教えてもらえたので、私のためにもなりました。

(5年 菅 雅美)

大場さんから話を聞いていろいろなことがわかりました。特に一日で140kmも進めるなんてびっくりしました。わたしだったら、もうたくたでギブです。それなのに、大場さんはすごいなあと思いました。

(5年 渡邊美由紀)

専門家

「地球縦回り一周の旅」という夢と冒険の壮大な計画の第一ステージである‘グリーンランド内陸氷床縦断行 2004’の成功、心よりお祝い申し上げます。

私は1996年から大場さんの極地冒険用携帯食の考案、調製など大場さんの冒険を栄養面でサポートさせていただいています。今回のグリーンランドの旅においても携帯食調製や栄養面全般をコーディネートすることでこの冒険の一部をサポートさせていただいたことを嬉しく誇りに思っております。

今回の旅は大場さんにとっていつもの冒険に比べ体力的にはさほど激しいものではなかったと思いますが、隊長として2名の隊員がそれぞれグリーンランドでの旅の目的が達成できるよう努力を重ねられたことと存じます。大場さんは準備をしているときから冒険だと良くおっしゃっていました。スポンサーに協力を仰ぎ冒険のための準備も冒険の一部なのですね。また、極地冒険未経験の長谷さんをリードし身の安全を確保しながらの57日間は本当に大変だったと思いますが、この旅が無事成功されたのはひとえに大場さんの長年の冒険家としての経験が活かされた結果と存じます。また、隊員である長谷さんと宮下さんの活躍も本当に素晴らしいものでした。極地は初めてという長谷さんも短いトレーニング期間にもかかわらずよく頑張りました。いつもホームページを見ながら膝のトラブルなど案じていましたが、無事目的を果たされたこと心から嬉しく思います。縦断するだけでも過酷な中、大気汚染調査も敢行されました。この旅での調査結果を多くのところで活かし、環境問題を世界に向けてアピールしてほしいと願っています。宮下さんはベースキャンプマネージャーとして多くの困難に立ち向かいながらサポートしてくださいましたね。また、私たちと同じモンゴロイドであるイヌイットの村での生活の詳しいレポートは本当に楽しいものでした。グリーンランドの人たちの文化、食生活、自然との係わり合いなど、宮下さんのレポートで私たちは日本に居ながらにして多くのことを知ることができました。この貴重な経験をどうぞ大切にしてください。

最後になりましたが、これからの地球縦回り一周の旅 各ステージの成功を心からお祈り申し上げます。

地球縦回り1周の旅 プロジェクトへのコメント

岸上伸啓（国立民族学博物館）

グリーンランドは日本から物理的に遠い所にある国ですが、大量の水産物が日本に輸出されており、経済的に深い関係のある国の一つです。したがってグリーンランドは私たちにとって遠くて近い国といえます。ともあれ、私たちはグリーンランドの自然、文化、社会について多くのことを知りません。今回のプロジェクトでは、大場隊長らからの現地の情報や体験がリアルタイムでホームページなどを通して日本の小中学生に伝えられ、多くの子どもたちが異なる世界を知るきっかけになったと思います。メディアを利用したあらたな冒険プロジェクトであったと思います。

私の専門は極北地域に住む人々、とくにカナダのイヌイットの文化や社会に関する研究です。私は、小中学生の皆さんからの文化や社会についての質問に回答する者のひとりとして今回のプロジェクトに参加しました。食べ物や学校、遊び、言葉、時間などさまざまな問題がホームページを通して提起され、正直言ってお答えするのに苦労しました。私自身が答えられない問題も多くあったために、コペンハーゲンに移住したグリーンランドのイヌイットの友人に20年ぶりに 이메일で連絡を取ったりしました。

メディアの発展によって現地に行かなくても多くの情報を得ることができるようになりました。しかしながら今回のプロジェクトで私が強く感じたことは、やはり現地に行って、見て、聞いて、話して、食べて、みずから体験することが重要であるということです。異なる社会や文化での現地体験は、何物にも代え難い人生の宝物になると思います。今回、このプロジェクトに参加された小中学生の皆様は是非、大きな夢を心に描き、自らの冒険旅行にチャレンジしてみてください。

大場さんを中心に組まれている「地球縦回り一週の旅」という壮大な企画の第1弾・グリーンランド編は見事に成功して、おめでとうございます。

この企画は単なる冒険ではなく——もちろん、冒険的な要素はたぶんにあるが——教育的な側面が重視され、旅の途中に出会うさまざまな自然と社会的な現象を解釈する専門家がコメントを寄せる仕組みになっている。こうした姿勢に感心して、私もグリーンランド・イヌイトの社会と文化に関するコメントを発信させていただいた次第です。

日本におけるイヌイト研究はカナダおよびアラスカに偏り、グリーンランドに関する情報は少なく、実情は一般的にあまり知られていない。そのためか、グリーンランドは地の果てにあり、そこに住むイヌイトは最近まで世界から隔絶された状況にあったと思われるがちです。

しかし、然(さ)に非(あら)ず、だ。グリーンランドへは、何波にもわたってイヌイト集団が西方から入り、また西方へ戻るという複雑な歴史がある。最初の一波は今からおよそ4500年前に北東グリーンランドに入ったのにつづき、第2波は3000年前にほぼ全島に広がった。その後も行きつ戻りつの歴史が繰り返されたが、その歴史の立役者は主に北アメリカ大陸の住民だった。ということは、グリーンランドがデンマークの植民地になる16世紀まで地質的にも文化的にも北アメリカの一部だと認識すべきであろう。

もう一つグリーンランドの特徴といえば、最終的にデンマーク領になった18世紀以降のグリーンランド・イヌイトは、カナダおよびアラスカの先住民とは異なる歴史を持っていることである。少し詳細を加えれば、グリーンランドで敷かれた植民地支配方式では、イヌイトが「デンマーク化」されつつも、従来の文化と社会、そして言語は比較的温存するソフトな植民地支配であった。こうしたやりかたを「ノース型植民地主義」と名付ける。

それに対して、徹底した同化政策にさらされてきたカナダおよびアラスカとロシアでは、イヌイトの文化と社会が破壊的な打撃を受けている。こうした植民地支配を「アングロ・サクソン型植民地主義」と名付けよう。

しかし、ソフトであれ、「ノース型植民地主義」はしょせん、植民地主義であり、それを擁護するつもりはありません。グリーンランドのイヌイトは長い間、自律と自治を奪われ、住んでいる大地はデンマークの領土にされてしまいました。また、現在のグリーンランド・イヌイトに対してアルコール依存や文化的な疎外という、多くの社会的な問題を抱えている現実から目をそらしてはならない。

一方、デンマークは国家にイヌイトを依存させない努力をはらってきている。民族の魂とも言われる言語（イヌイト語）の保持率は高く、状況に応じて変化しつつも社会的な絆が保たれている。そのため、世界情勢に適応しながらグリーンランド・イヌイトが「伝統」と「近代」を調和させ、独自の社会を維持していくであろうということが私の感想である。

EdVenture : 冒険のフロンティア
—大場・長谷・宮下隊グリーンランド氷床縦断の意義—
藤井理行（国立極地研究所）

世間では大場満郎さんを「冒険家」と呼ぶ。大場さん自身も「冒険学校」を主宰しているので、「冒険家」で良いのかもしれないが、世間と大場さんの間には「冒険」に対する認識に大きなギャップがあるように思える。通常、「冒険」とは「危険を伴うことをあえてすること、あるいは、成功の見込みの少ないことを無理にすること」（大辞林）であるが、大場さんは1997年に4回目にして北極単独横断を果たした後、「冒険とは、”自然に勝つ”ことではなく、”自然に勝てない”ことを知ること」（Heart Beat : 2000）との境地に達し、「自然に対する畏敬、謙虚、感謝の念」を伝えたく冒険学校を開校したのである。また、「冒険とは“生きる“こと」（毎日キャリアナビ : 2002）とも語っている。自然に対する挑戦的な姿勢から昇華した大場さんの自然観、生死観に、日本人のDNA的精神を感じる。やはり「冒険家」とされた植村直巳さんが、「冒険とは生きて還ること」との境地に至ったのと符合する。極限の世界は、人の精神を純化するのであろう。

大場さんに初めて会ったのは、2002年1月、NHKの南極番組に出演した時のことである。控え室では、台本に目を通すよりは、大場さんと歓談に花を咲かせた。「地球縦回り一周の旅」計画の壮大さに興奮し、地球の旅を子供たちの教育の場とする構想の斬新さに感心した。大場さんは、「地球縦回り一周の旅」を英語で「Global EdVenture」と称した。冒険しながら、地球の今を学ぶという意味を込め、Education(教育)と、Adventure(冒険)からなる新合成語である。大場さんの冒険観は、さらに進化したのである。

EdVentureの第一弾は「グリーンランド氷床縦断」で、小生はその応援団の一員にさせて頂いた。グリーンランド氷床は、地球環境問題の格好の教材である。1989年の初夏、小生は8人の仲間とグリーンランド氷床で深さ215mまでの氷のボーリングを行った。この氷のサンプルの分析は、過去150年ほど前から降水の酸性化が始まり、1970年代にピークに達したことなどを明らかにしていた。文明の地から遠く離れたグリーンランド氷床が、人間活動による酸で広範囲に汚染されていることを子供たちに発信できるのは、このグリーンランド氷床縦断隊しかない。衛星通信を通じた子供たちと氷床縦断隊との双方向のやり取りは、新しい環境教育の先駆けである。57日間、2500kmにわたってグリーンランドの大雪原に残した大場満郎、長谷徹志両氏のシュプール、それを沿岸部でサポートした宮下典子さんの足跡は、世界で初めてのEdVentureとなった。

「地球縦回り一周の旅」の第一弾の成功を祝すとともに、今後の第二弾、第三弾と続く旅のロマンを期待する。冒険のフロンティアに乾杯。

今回の「地球縦回り一周の旅ー21世紀冒険プロジェクト」に、小中学校からの質問に答える専門家という立場で参加させていただきました。肩書きは「専門家」という身に余るものでしたが、私自身は、隊員として参加した長谷さんの仲間としてプロジェクトに貢献できたらと思い参加いたしました。

このプロジェクトの魅力の一つは、これまで大きな冒険をいくつも成功させてきた大場さんが、研究テーマを持った若い隊員と一緒に準備をし旅をすることだと思います。今回は長谷さんと宮下さんが参加されました。プロジェクトに早い段階から参加し、プロジェクトの実行に至るまでの様々な準備や申請などのプロセス、そして自分のテーマをやり遂げたことは、とても貴重な経験になったことと思います。正直言って、2003年の12月に長谷君からグリーンランド氷床の入域許可などの申請の相談を受けたときは、出発までの期間が短かったことと彼の頼りなさげな様子からとても心配になりましたが、旅行が終わってグリーンランドの電話で長谷さんの声を聞いたときには、とても逞しくなったなあと感じました。

このプロジェクトのもう一つの主題はパイロット学校との交流です。パイロット校の生徒たちは現地の隊員との交信に胸躍らせたのではないのでしょうか。その中で生徒からの質問に専門家が回答する試みがありました。私もいくつかの質問に答えましたが、この試みはどうだったのでしょうか。専門家や隊員が回答した質問の多くは、隊員達の旅行とはあまり関係のないものでした。もう少しスケジュールに余裕を持たせ、旅行開始前に生徒と専門家の質疑応答を行い、その地域の文化や環境を生徒が理解した上で旅行中の隊員と交流を行うというスケジュールの方がより内容が充実すると思います。プロジェクトは今後も続きますから次回に向けて魅力的なものに改善されていくことを期待します。

今、地球の環境が大きく変化しようとしていることが指摘されています。人工衛星を使った観測やコンピューターシミュレーションを使った解析が地球の変化を見知し未来を予測しています。しかし、いくら観測や解析の手段が発達しても、地球の環境の変化や仕組みを知るためには、直に自分の目で見なければ分からないことがあります。このプロジェクトがさらに発展し、若者に貴重な機会を与え続けていくことを願っています。

第三章 メディア報告

新聞

- <2003年11月15日>岐阜新聞、京都新聞、山陽新聞、東奥日報、山形新聞
- <2003年11月16日>茨城新聞、愛媛新聞、山陰中央新報、産経新聞、福井新聞、宮崎日日新聞、山口新聞
- <2003年11月17日>河北新報
- <2003年11月25日>東京新聞共同通信社より、「地球縦回り一周の旅」の第一弾として、2004年4月からグリーンランド縦断に挑むというニュースが配信され、全国の新聞に掲載された。

- <2004年1月3日>日本経済新聞
 - <2004年1月8日>東京新聞
 - <2004年2月28日>山形新聞
- 3月末にグリーンランドを皮切りに「地球縦回り一周の旅」をスタートさせ、現地からの写真と原稿を連載することが伝えられる。

- <2004年3月4日>朝日小学生新聞
- グリーンランドへの出発を前に、パイロット校を訪れた様子が伝えられる。



朝日小学生新聞
2004年3月4日

- <2004年3月10日>産経新聞（山形）

- <2004年3月17日>読売新聞
 - <2004年3月22日>山形新聞
- 2004年3月21日に東京で開催した壮行会について伝えられる。

- <2004年3月26日>毎日新聞
- <2004年3月30日>朝日新聞、サンケイスポーツ、日刊スポーツ、読売新聞
- <2004年3月31日>スポーツニッポン、スポーツ報知、中日スポーツ、デイリースポーツ、山形新聞

大場、長谷、宮下の三名が2004年3月30日にグリーンランドへ向けて出発することが伝えられる（出発前日、共同通信でも配信）。



山形新聞
2004年3月22日

● <2004年4月3日>山形新聞

グリーンランドからの写真と原稿による連載がスタートする。

➤4月14日、4月26日、5月2日、5月9日、5月19日（中間地点で補給を受ける）、5月21日（満沢小学校と交信を行う）、5月24日、6月1日（ゴールに到達する）、6月8日、6月16日（無事に帰国する）、6月19日

● <2004年5月20日>十勝毎日新聞

白樺学園高等学校の生徒たちとの交信の様子が伝えられる。

● <2004年5月27日>読売新聞

ヨミウリ・ジュニア・プレスの記者が、電話でグリーンランドで活動する三名に取材し、現地の様子が伝えられる。



山形新聞 2004年4月26日



山形新聞 2004年5月21日



山形新聞 2004年5月24日

- <2004年5月27日>ATUAGAGDLIUTIT (通称AG (アギ) と呼ばれているグリーンランドの新聞) 宮下が氷床縦断エクスペディションのサポートをしながらグリーンランドの各地を周り、それをホームページに載せていることや、小さな村での人々との交流について伝えている。

- <2004年6月2日>読売新聞
現地時間2004年5月31日に、内陸氷床縦断のゴール地点となるグリーンランドの北端に到達したことが伝えられる。

- <2004年6月2日>埼玉新聞
<2004年6月8日>東京新聞 (埼玉)
<2004年6月9日>産経新聞 (埼玉)
深谷市立深谷小学校の生徒たちとの交信の様子が伝えられる。



AG (アギ) 2004年5月27日

- <2004年6月27日>山形新聞
<2004年6月28日>山形新聞
<2004年6月29日>山形新聞
三日連続で、大場の写真グラフが組まれる。

- <2004年7月7日>埼玉新聞
<2004年7月7日>東京新聞 (埼玉)
<2004年7月7日>毎日新聞 (埼玉)
大場、長谷、宮下の三名が、帰国の報告で深谷小学校を訪れた模様が伝えられる。

- <2004年7月9日>山形新聞
大場が、帰国の報告で母校である満沢小学校を訪れた模様が伝えられる。



AG (アギ) 2004年5月27日

雑誌

- ソトコト 5月号 (毎月1回1日発行)
「地球縦回り一周の旅」がスタート！と題した、宮下の原稿が掲載される。
- BE-PAL 6月号 (毎月1回10日発行)
冒険家・大場満郎さんの「地球縦回り」冒険装備、公開！と題して、グリーンランド内陸氷床縦断に使われる装備を全カラー写真で大公開。

テレビ

- NHK 教育テレビ「科学大好き土よう塾」（毎週土曜日 9：15～9：59）
＜2004 年 4 月 10 日＞グリーンランド出発を目前に、大場、長谷、宮下の三名が揃って、山形の冒険学校でトレーニングをする様子などが伝えられる。
＜2004 年 7 月 10 日、7 月 17 日＞グリーンランドで撮影した映像を交えて、大場がスタジオでグリーンランドでの活動を報告する。2 週連続。
- 日本テレビ「ズームイン！！SUPER」（月曜～金曜、毎朝 3 時間の生放送）
＜2004 年 3 月 31 日＞3 月 30 日に、大場、長谷、宮下の三名がグリーンランドへ向けて出発したことが伝えられる。
＜2004 年 4 月 23 日＞スタジオにソリを持ち込んで、実際に大場と長谷が引いているソリの重さを再現。大場が生電話で声の出演。
＜2004 年 6 月 4 日＞大場が生電話で声の出演。クレバスやホワイトアウトの写真を交えて、グリーンランドでの様子を伝える。
＜2004 年 6 月 21 日＞山形の冒険学校の大場とスタジオを生中継で結んで、グリーンランドでの活動を終えて無事に帰国したことを伝える。
- 山形放送「ニュースプラス 1」
＜2004 年 4 月 16 日、4 月 28 日、5 月 7 日、5 月 19 日、5 月 27 日、6 月 3 日＞毎回、写真を交えて大場が声の出演。
＜2004 年 6 月 15 日＞成田空港に到着した時の様子や、その後の簡単な報告会の様子が伝えられる。
- KNR-TV（グリーンランドで唯一のテレビ局）
＜2004 年 4 月 23 日＞宮下がインタビューを受け、グリーンランドで進行中の「地球縦回り一周の旅」について伝えられる。

ラジオ

- NHK ラジオ第一「ラジオあさいちばん」（毎朝 5：00～）
＜2004 年 4 月 5 日、4 月 19 日、5 月 3 日、5 月 17 日、5 月 31 日、6 月 14 日、6 月 28 日＞地球縦回りの旅—グリーンランド環境レポートと題して、隔週一回、大場が電話で出演。
- TBS ラジオ「中村尚登ニュースプラザ」
＜2004 年 5 月 8 日＞大場が電話でインタビューを受ける。
- JFN「Good morning! THAT' S WAKEMAN SHOW」
＜2004 年 5 月 6 日＞大場が電話で生出演。

第四章 収支報告

収支報告

(「地球縦回り」基本準備期間含む)

単位:円

(収入の部)		
科目	予算額	備考
応援金(個人)	978,000	期間: 2003年5月～2004年7月現在
応援金(企業)	9,871,522	
原稿料・出演料	1,641,100	
合計	12,490,622	

(支出の部)		
科目	予算額	備考
地球縦回り事務局(2003年度)		5月～12月(「地球縦回り」基本準備期間として)
事務局賃料	840,000	105,000×8ヶ月
光熱費	129,054	
通信費	59,904	
消耗品・事務用品	188,937	
郵送・印刷・プリント	131,202	
交通費	108,720	
グリーンランド準備(装備購入・輸送等)	—	
雑費(振込手数料、書籍など)	58,070	
人件費	786,300	事務局員2名
小計	2,302,187	
地球縦回り事務局(2004年度)		1月～7月現在
事務局賃料	735,000	105,000×7ヶ月
光熱費	316,782	
通信費(衛星携帯電話含む)	1,198,541	未払: 衛星携帯電話6月通話料・アルゴス使用料
消耗品・事務用品	227,480	
郵送・印刷・プリント	306,991	
交通費	234,600	
グリーンランド準備(装備購入・輸送等)	2,654,588	
雑費(振込手数料、書籍など)	39,295	
人件費	2,216,352	事務局員2名
小計	7,929,629	
グリーンランド現地実費		期間: 2004年3月30日～2004年6月15日
交通費	553,138	
輸送・チャーター	4,928,267	
通信費	209,223	
宿泊費	613,176	
食費	149,746	
必需品(補給物資・消耗品)	81,113	
謝礼	45,900	
保険	606,592	
現地コーディネーター料	535,965	
小計	7,723,120	
合計	17,954,936	

謝辞

謝辞

(敬称略、五十音順)

阿部興二、網谷憲治、網谷由美子、アムゼ株式会社、荒井りんごや、
荒木裕子（聖徳栄養短期大学）、五十嵐誠（国立極地研究所）、
五十嵐隆一（山形県最上町教育委員会教育長）、石神毛皮株式会社、和泉功、井出浩之、
岩坂泰信（名古屋大学）、岩田伊津樹、岩村隆生、インビスタジャパン株式会社、
植村直己冒険館、江里口正純、エンペックス気象計株式会社、大阪市立新東三国小学校、
大島育雄、大竹政光（明治大学）、大西郷、加藤登紀子（国連環境計画親善大使）、
かねさ販売株式会社札幌支店、株式会社 ICI 石井スポーツ本店、株式会社 JON72、
株式会社 KDDI エムサット、株式会社 エッセンバツハ光学ジャパン、株式会社 菊水、
株式会社 キュービックアイ、株式会社 ゴールドウィン、株式会社 坂商、株式会社 シークラフト、
株式会社 資生堂、株式会社 スター商事、株式会社 千代田ラフト、株式会社 東京チタニウム、
株式会社 ハイマウント、株式会社 ハシモト、株式会社 ミツワ製作所、株式会社 モチヅキ、
株式会社 山形銀行、株式会社 山形新聞社、株式会社 リュウホン、菅香織、
岸上伸啓（国立民族学博物館）、キャノン株式会社、京セラ株式会社、清田哲、倉成正也、
小池正治、コールマンジャパン株式会社、小海道弘、小海洋美、国際空港事業株式会社、
国立オリンピック記念青少年総合センター、後藤利行、小林良二、小林節子、小松親次郎、
坂田輝、坂本悠紀子、佐々木伸夫、佐藤浩治、佐藤義雄、佐藤理果子、志賀忠重、
社団法人協力隊を育てる会、社団法人世界貿易センター、社団法人日本雪氷学会、
ジャパングアテックス株式会社、白樺学園高等学校、白崎多賀子、菅原敬弥、杉山孝彦、
スチュアート ヘンリ（放送大学）、住友金属工業株式会社、住友不動産シスコン株式会社、
聖恵 03 インフォメーションズ有限会社、セイコー株式会社、全日本空輸株式会社、
象印マホービン株式会社、ソトコト、田尾宏文、高橋和雄（山形県知事）、高橋成雄、
高橋美代子、高林寛昭、タキロン株式会社、武石浩明、武内陶子、多田福男、谷本都栄、
タマキスポーツ、タマヤテクニクス株式会社、千代田区立一橋中学校、ツバル国名誉総領事館、
寺田玄、富岡賢治、どんぐり、ナカムラ、並河睦夫、鳴嶋寛子、西畑康秀、日本通運株式会社、
日本テレビ放送網株式会社、日本放送協会、野口健、旗本浩二、林秀美、原和子、
ビクトリノックスジャパン株式会社、深谷市教育委員会、深谷市立深谷小学校、福島隆宏、
福島美紀、藤井理行（国立極地研究所）、本多孝成、前島篤志、松岡毛織、松木篤、
的場澄人（国立環境研究所）、三菱自動車工業株式会社、宮内喜一郎（みやうち鍛冶屋）、
宮澤武志、宮下正光、宮下花枝、宮下香代子、宮下孝之、宮下知子、宮本貞雄、
宗像信生（立教大学）、明治食品株式会社、明治製菓株式会社、明大スポーツ、
最上町立満沢小学校、最上ロータリークラブ、安井和憲、山形放送、
山形三菱自動車販売株式会社、山田慶子、山田丸、山本光学株式会社、有限会社アウトバック、
有限会社ダックス、有限会社ハウショウ、ユニバーサルトレーディング株式会社、
横浜市立新吉田第二小学校、吉野紗貴、ルフトハンザドイツ航空会社、
ワールドトレードセンター株式会社、渡邊淳、渡辺洋、air-BE-PAL、Air Greenland、
Alberth Lukassen、Aleqa Hammond、Ane Hette Karlsen、Ane Loeustrom、
Anna Kuitse Thastum、Arne Fleishcer、Arvid Thastum、BE-PAL、Bertha Jensen、

Birthe Pedersen、Buuju Janussen、Buuti、Danish Polar Center、
Dmitry Shparo（アドベンチャークラブ代表）、Doanna Neville、
Dora Drechsel (If Insurance)、Dorthe Egede、Dr. Anne、Dr. Mohammed、
Edvard Kruse-p Atuarfia、Emilie Kristiansen、Flemming Kasik Nicolaisen、
Frederikke Petrussen、Georg Nyegaard、Greenland Tourism、
Hans Enoksen（グリーンランド首相）、Hans Kristiansen、Henning S Pedersen、
Hideo Sawahata、Hotel Qaanaaq、Hugo Svenson、Ilannguaq Egede、Isak Nathanielsen、
Ivalo Egede、JA 全農山形、Jacky Simon & Birgitte、Jens Napatok、Jonas Nielson、
Judithe Kruse、Kangerlussuaq Tourism、Kenn Borek Air、Karo Thomsen、KDDI 株式会社、
Klaus Toepfer（国際連合環境計画事務局長）、Lars Ebbesen、Liisi Egede Hegelund、
MAHE FREIGHT A/S、Marianne Jensen、Mark Nielsen、Mette-Astrid-Jessen、
Michael Pedersen、Neil & Tone Hess、NHK 放送センター、NHK ラジオセンター、
Niarqornat Atuarfia、Nipisa、Nuuna Papis (Air Greenland Charter)、Ole G. Jensen、
Ole Jorgen Hammeken、Ono Fleishcer、Panigpak Daorana、
Paulie & Kristian Qujaukitsoq、Peter Robinson、Richard Schwartz、Rasmus Lyberth、
Robert Holmene、Saki Daorana、Scott McAuliffe、Thericia Jansen、Toku Oshima、
Tom Egg Stimson、Uummannaq Tourism、Uunartoq Loeustrom、Uusarqak Qujaukitsoq